

# 八世紀における境界認識

## ―大和国を中心に―

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻 久葉 智代

### 要 旨

本論文では、八世紀における大和国周辺のどのような場所が境界とされていたのか、そしてその境界がどのように認識されていたのかを、自然と人工の両面から検討する。主に以下の二点に着目する。

一つ目は、自然地形と交通路との関係である。『日本書紀』の改新詔にみられる畿内堺のように、古代における境界は山や川を一つの区切りとしている。その境界とは、現代のように明確な線を引いたものではなく、ある地点から見た各方向の一点点を代表させたものである。大和国に目を向けると、『万葉集』では、北・南・西の各方向において、奈良山・真土山・生駒山・龍田山というそれぞれの山が境界として認識されている。これは、いずれも平城京からの交通路上に位置する山である。東の境界のみはほとんど現れないが、平城京から東へ向かうには、直接東方の山を越えるのではなく、一旦南下する必要があり、交通路を基にした境界認識を持っていた当時の人々にとっては、東へ向かうという体感が乏しかったことがその一因であると考えられる。

二つ目は、祭祀と境界との関係である。境界で行われる祭祀として、「手向け」がある。交通路の主要な地点（主に坂や峠）において安全を祈る行為であるが、前述した大和国周辺の山が手向けを行う場となっていることが『万葉集』からわかる。

また、都城や畿内の境界において行われる疫神祭祀について、「疫神が交通路を通じて入ってくる」という指摘は従来からなされている。加えて、『日本書紀』の記事の中で、大和国の周辺で祭祀を行ったとされる場が、交通路上で境界とされる山々と一致している。祭祀における境界も、交通路が基になっていることがわかる。

ある地点を境界として認識するということは、単なる景物に境界性を与えるのではなく、自らが交通路を利用して移動する際の状況を投影したものであった。この時代の境界とは、現代のように俯瞰で正確な地形を捉え、明確な線を引くものではなく、曖昧な幅を持ったものであったといえる。そのような境界に囲まれた空間の把握についても、明確な領域の意識があったのではなく、自身の経験と認知によるものであったと推測される。

キーワード：八世紀 境界 古代道路 境界祭祀 空間認識

はじめに

第一章 境界はいかに現れるか

一. 定められた境界

二. 意識される境界

第二章 境界と祭祀

一. 交通祭祀

二. 疫神祭祀

おわりに

## はじめに

現代においても国境や都道府県境など、さまざまなレベルでの境界が存在する一方で、そこを越えた交流もしばしば行われる。境界は古代から存在するが、古代における境界はいかなるものであったのだろうか。

畿内界や国境・郡境などの制度としての境界は、従来、歴史学や地理学の観点から論じられてきた。観念的なものとしての境界も、折口信夫をはじめとして民俗学で研究が行われてきたが<sup>(1)</sup>、制度や実態としての境界と観念上の境界にいかなる関係があったかはいまだに言及されることがほとんどない。

そもそも境界とは何か。ブルース・バートン氏は、まず境界にはさまざまな種類があるとし、政治・文化・経済の三種類に分類した。また、境界の形態には、意図的に設置された人工的なものもあれば、社会を構成する人々や集団の長期にわたる営みによって自然にできあがる境界もあると述べている。そして、前近代の境界は後者が多いとする<sup>(2)</sup>。

そのような発生の仕方でも分類すれば、従来、歴史学や地理学が対象としてきたのは人工的な境界であり、民俗学が対象としてきたのは自然な

境界であるといえる。しかし、人工的とされる境界も、何らかの要因が根拠となって決められたと見るのが自然であろう。

先に述べたように、境界の性格には制度的・人工的なものと、慣習などによる自然発生的なものがある。この二つの性格の境界は従来別個に論じられてきたが、無関係ではないと考えられる。本稿では、対象を八世紀における大和国とその周辺とし、空間が何を根拠として区切られていたのか、人々はそれをどのように認識していたのかを明らかにすることを目的とする。また、その場合、区切られた空間の内側だけに目を向けるのではなく、そこを越えて別の空間へと往来する行為、すなわち越境も重要な視点となる。それを担うのが交通路であり、空間自体の存在という静の面に對する、人々の交通という動の面にあたる。本稿は境界認識を歴史学の中に位置づけようと試みるものであるが、その方法として、国境などの行政区画や、そこを往来する交通路に関しては地理学の、境界に対しての観念に関しては文学の観点も取り入れ、複合的に分析することとする。

なお、ある一つの空間を区切る境界をテーマとする場合、そこに居住する人物の視点を中心とする。そこで、本稿では対象とする大和国の性質上、平城京に住む官人たちの視点を中心とする。

## 第一章 境界はいかに現れるか

### 一. 定められた境界

まず、制度としての境界について述べたい。以下に挙げる史料のうち、『日本書紀』は八世紀以前の記事であるが、成立が八世紀であるため、当時の状況がある程度反映していると考えて良いだろう。史料において大和国の周辺にどのようなレベルの境界が存在するのかを見ていく。境界を定めたものとして代表的なものは、次に挙げる改新詔に見られる畿内の界であろう。

(前略) 凡畿内、東自<sup>二</sup>名壑横河<sup>一</sup>以来、南自<sup>二</sup>紀伊兄山<sup>一</sup>以来、(兄、此云<sup>レ</sup>制。)西自<sup>二</sup>赤石櫛淵<sup>一</sup>以来、北自<sup>二</sup>近江狭々波合坂山<sup>一</sup>以来、為<sup>二</sup>畿内国<sup>一</sup>。(後略) (『日本書紀』大化二年正月甲子条)

なぜこのような畿内の境界が設定されたのかについては、八木充氏は「地域的な境界を指すのではなく、京師につうずる基幹交通路上の境界点にはかならない」とし<sup>(3)</sup>、この後も、出田和久氏や門井直哉氏によって、これら四地点が大和からの主要交通路と関わりとする指摘がなされている<sup>(4)</sup>。

その他には、国境や郡境が挙げられるだろう。『日本書紀』の成務天皇の時代には、山河を境界として国県を分けるという記述が見られる。

五年秋九月、令<sup>二</sup>諸国<sup>一</sup>、以国郡立<sup>二</sup>造長<sup>一</sup>、県邑置<sup>二</sup>稻置<sup>一</sup>。並賜<sup>二</sup>盾矛<sup>一</sup>以為<sup>レ</sup>表。則隔<sup>二</sup>山河<sup>一</sup>而分<sup>二</sup>国県<sup>一</sup>、隨<sup>二</sup>阡陌<sup>一</sup>以定<sup>二</sup>邑里<sup>一</sup>。

(『日本書紀』成務天皇五年九月条)

この記事によれば、国や県は山河、つまり自然地形を基にして定められたことが読み取れる。また『出雲国風土記』には多くの国境や郡境の記述が見られるが、その多くが山や川である。一部の例を挙げると、次の通りである。

通<sup>二</sup>国東堺手間割<sup>一</sup>、卅一里二百八十歩。通<sup>二</sup>大原郡堺林垣峰<sup>一</sup>、卅三里二百歩。通<sup>二</sup>出雲郡堺佐雜崎<sup>一</sup>、卅一里卅歩。通<sup>二</sup>嶋根郡堺朝酌渡<sup>一</sup>、四里二百六十歩。  
(意宇郡条)

このように畿内の堺をはじめとして、境界は地点で表されることが多いことがわかる。このことに関して、自然的地物によって境界線を設け

るといふよりも、それらをランドマークとして交通路を区切るという行為が当初の実態であると門井氏は指摘している<sup>(5)</sup>。また他方では、交通路上のポイントやランドマークによって代表させながら断続的に続く点線のような境界、その一方で「おそらく観念的には三百六十度を囲んでいるのが古代の境界の実態である」という指摘が中村太一氏によってなされている<sup>(6)</sup>。しかし、「三百六十度を囲む」という発想は、俯瞰の視点が前提にあると考えられ、これは現代的な発想といえる。現代における空中写真のようなものと異なり、古代において俯瞰で正確に地形を把握しているとは考えられない。国見のように、周囲より高い場所から低い場所を眺めることはあるが、全国においてすべての地形をそのように把握することは難しく、俯瞰の視点を一般論として敷衍することはできないだろう。

一例として、記紀には「四方国」の概念が見られる。これは、中央の一点を中心に四方への方向で空間が認識されていると考えられる。同様の概念は『延喜式』にも見え、都城を中心として、東西南北の地点が国土の境界として認識されていたことがわかる。つまり、国土とは線で囲まれた区域ではなく、各方角の一地点の内側にあるものと認識されていたのである。

(前略) 四方之堺。東方陸奥。西方遠値嘉。南方土佐。北方佐渡(与里)乎知能所乎。(後略) (延喜陰陽寮式 儼祭条)

また、後述するが、大和国から東方への境界が意識されないこともその一つの証左となりえよう。

境界とは、山や川といった地点で表されるものであり、領域とはその地点の内側に広がる場であると考えられる。その山や川などの地点は、人々の日常の往来の中で意識されるものであろう。交通と境界とは、諸

先行研究が指摘するように、密接な関係を持っているものである。以下で、交通という観点から大和国周辺の境界について検討する。

## 二、意識される境界

次に、大和国周辺において、人々の意識に現れる境界について考えたい。『万葉集』には、当時の人々がどのように移動していたかがわかる歌が多くある。その中でも、国司の赴任や罪人としての流刑などに際して、中央の官人たちが地方へと向かう際に大和国を出ていく旅の状況を詠んだ歌が多い。その中で注目すべきは、大和国を取り囲む山が多く詠み込まれていることである。ここでは、その山々と交通路との関係を分析し、それが境界認識にいかにつながるかを考えたい。以下に述べる道路と山については、適宜図1を、歌については次頁の表も参照していただきたい。前節において、境界とは線ではなく各方向の地点で認識されていると述べた。そこで、平城京を中心とした東西南北の各方向へ目を向ける。まずは北である。

空見津 倭国 青丹吉 常山越而 山代之 管木之原 血速旧 于遲乃  
 渡 瀧屋之 阿後尼之原尾 千歳尔 欠事無 万歳尔 有通将得 山科  
 之 石田之杜之 須馬神尔 奴左取向而 吾者越往 相坂山遠  
 (そらみつ 大和の国 あをによし 奈良山越えて 山背の 管木の  
 原ちはやぶる 宇治の渡り 瀧つ屋の 阿後尼の原を 千年に 欠くる  
 ことなく 万代に あり通はむと 山科の 石田の杜の すめ神に 幣取  
 り向けて 我は越え行く 逢坂山を 卷十三・三三三六番歌 作者不明)

右のように、平城京の北方では奈良山が詠まれる。ここには平城京から北へ向かう道筋が描写されているが、これは当時の北陸道であり、奈良山はその途中、大和国と山背国の国境に位置する山である。

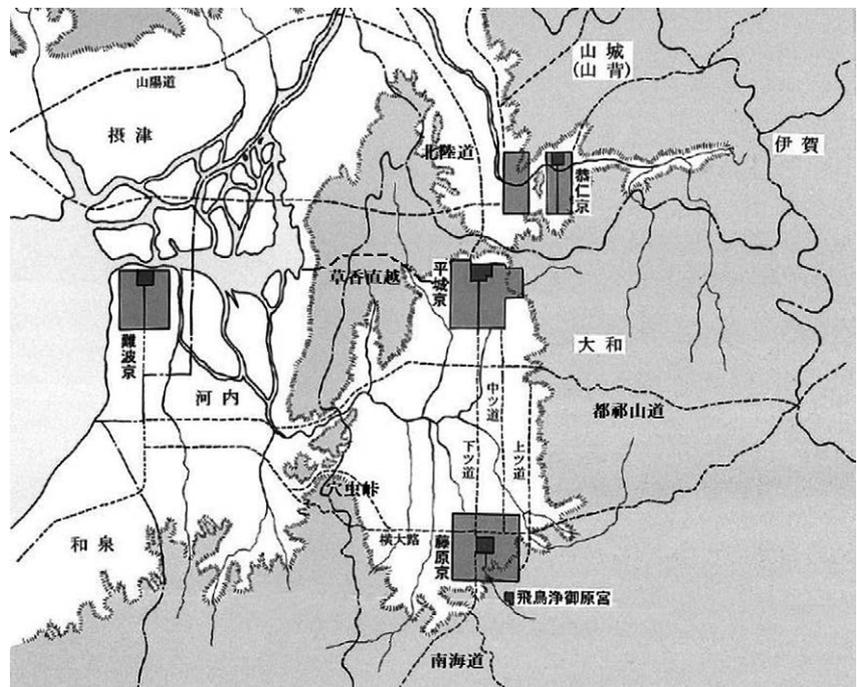


図1 大和国周辺の道路 (奈良文化財研究所編『日中古代都城図録』2002年より引用・加工)

続いて南はどうであろうか。

亦打山 暮越行而 廬前乃 角太川原尔 独可毛将宿  
 (真土山夕越え行きて 廬前の角太川原にひとりかも寝む 卷三・  
 二九八番歌 弁基)

大和国の南にある山としては真土山が現れる。平城京から南へは南海道が伸びており、真土山はその途中の大和国と紀伊国の国境にある山である。

表 『万葉集』における奈良盆地周辺の山

巻	歌番号	
3	298	真土山夕越え行きて廬前の角太川原にひとりかも寝む
3	300	佐保過ぎて奈良の手向けに置く幣は妹を目離れず相見しめとぞ
4	543	大君の 行幸のまにま もののふの 八十伴の男と 出で行きし 愛し夫は 天飛ぶや 軽の路より 玉たすき 畝傍を見つつ あさもよし 紀路に入り立ち 真土山 越ゆらむ君は 黄葉の 散り飛ぶ見つつ にきびにし 我れは思はず 草枕 旅をよろしと 思ひつつ 君はあらむと あそそには かつは知れども しかすがに 黙もえあらねば 我が背子が 行きのまにまに 追はむとは 千たび思へど 手弱女の 我が身にしあれば 道守の 問はむ答へを 言ひやらむ すべてを知らにと 立ちてつまづく
4	626異	君により言の繁きを龍田越え御津の浜辺にみそぎしに行く
6	1019	石上 布留の命は 手弱女の 惑ひによりて 馬じもの 縄取り付け 獣じもの 弓矢囲みて 大君の 命畏み 天離る 鄙辺に罷る 古衣 真土の山ゆ 帰り来ぬかも
7	1192	白栲ににほふ真土の山川に我が馬なづむ家恋ふらしも
9	1680	あさもよし紀へ行く君が真土山越ゆらむ今日ぞ雨な降りそね
9	1749	白雲の 龍田の山を 夕暮れに うち越え行けば 瀧の上の 桜の花は 咲きたるは 散り過ぎにけり ふうめめるは 咲き継ぎぬべし こちごちの 花の盛りに ならずとも 君がみ行きは 今にしあるべし
10	2201	妹がりと馬に鞍置きて生駒山うち越え来れば黄葉散りつつ
12	3154	いで我が駒早く行きこそ真土山待つらむ妹を行きて早見む
13	3236	そらみつ 大和の国 あをによし 奈良山越えて 山背の 管木の原 ちはやぶる 宇治の渡り 瀧つ屋の 阿後尼の原を 千年に 欠くることなく 万代に あり通はむと 山科の 石田の杜の すめ神に 幣取り向けて 我れは越え行く 逢坂山を
13	3237	あをによし 奈良山過ぎて もののふの 宇治川渡り 娘子らに 逢坂山に 手向け草 幣取り置きて 我妹子に 近江の海の 沖つ波 来寄る浜辺を くれくれと ひとりぞ我が来る 妹が目を欲り
13	3240	大君の 命畏み 見れど飽かぬ 奈良山越えて 真木積む 泉の川の 早き瀬を 棹さし渡り ちはやぶる 宇治の渡りの たきつ瀬を 見つつ渡りて 近江道の 逢坂山に 手向けして 我が越え行けば 楽浪の 志賀の唐崎 幸くあらば またかへり見む 道の隈 八十隈ごとに 嘆きつつ 我が過ぎ行けば いや遠に 里離り来ぬ いや高に 山も越え来ぬ 剣太刀 鞘ゆ抜き出でて 伊香胡山 いかにか我がせむ ゆくへ知らずて
15	3589	夕さればひぐらし来鳴く生駒山越えてぞ我が来る妹が目を欲り
15	3590	妹に逢はずあらばすべなみ岩根踏む生駒の山を越えてぞ我が来る
15	3722	大伴の御津の泊りに船泊てて龍田の山をいつか越え行かむ
17	3957	天離る 鄙治めにと 大君の 任けのまにまに 出でて来し 我れを送ると あをによし 奈良山過ぎて 泉川 清き河原に 馬留め 別れし時に ま幸くて 我れ帰り来む 平らけく 齋ひて待と 語らひて 来し日の 極み 玉梓の 道をた遠み 山川の 隔りてあれば 恋しけく 日長きものを見まく欲り 思ふ間に 玉梓の 使の来れば 嬉しきと 我が待ち問ふに およづれの たはこととかも はしきよし 汝弟の命 なにし かも 時しはあらむを はだすすき 穂に出づる秋の 萩の花 にほへる宿を 朝庭に 出で立ち平し 夕庭に 踏み平げず 佐保の内の 里を行き過ぎ あしひきの 山の木末に 白雲に 立ちたなびくと 我れに告げつる

以上のように、北と南に關しては道路とその途上にある山との關係が明確であるが、西と東に關してはいささか問題が残る。まず大和国の西側に目を向けたい。

君尔因言之繁乎 龍田超 三津之浜辺尔 潔身四二由久

(君により言の繁きを龍田越え御津の浜辺にみそぎしに行く 卷四・六二六番歌異本 八代女王)

大伴乃 美津能等麻里尔 布祢波弓々 多都多能山乎 伊都可故延伊加武  
(大伴の御津の泊りに船泊てて龍田の山をいつか越え行かむ 卷十五・三七二番歌 遣新羅使節)

大和国から西の河内国へ向かう道の代表的なものは、右の歌に詠まれているように、龍田山を通る龍田越えであろう。一つ目に挙げた歌は、噂のために、難波の御津の浜辺で禊を行うことが詠まれている。この際、平城京に居づらくなつた詠み人にとって、そこを出ていく道中の龍田山が、地理的な境界のみならず、禊の場へ向かう心理的な境界ともなつていると言えるだろう。

ただし、大和国と河内国は龍田山に限らず、生駒山脈によつても隔てられている。そして、その生駒山脈を越える道路もあつたことがうかがえるのである。『万葉集』にも、

伊毛尔安波受 安良婆須徹奈美 伊波祢布牟 伊故麻乃山乎 故延弓曾  
安我久流

(妹に逢はずあならばすべなみ岩根踏む生駒の山を越えてぞ我が来る  
卷十五・三五九〇番歌 遣新羅使節)

とあるが、実際に生駒山脈を越える道にはどのようなものがあつたのか。以下で検討していく。

夏四月丙申朔甲辰、皇師勒兵、步趣龍田。而其路狭嶮、人不得並行。乃還更欲東踰膽駒山、而入中洲。時長髓彦聞之曰、夫天神子等所以来者、必将奪我国、則盡起属兵、徼之於孔舍衛坂、与之会戰。

(『日本書紀』神武天皇即位前紀戊午年四月甲辰条)

右の史料は『日本書紀』にみえる神武天皇の時代とされる出来事の記事であるが、編纂された八世紀段階の状況をある程度反映していると考えて良いだろう。これによると、東征の際に生駒山を越えようとしたところ、長髓彦が兵を起こして孔舍衛の坂で戦つたという。ここに見える孔舍衛の坂は現在の生駒山の西麓、東大阪市にある。

則遣坂本臣財・長尾直真墨・倉墻直麻呂・民直小鮪・谷直根麻呂、率三百軍士、距於龍田。復遣佐味君少麻呂、率数百人、屯大坂。遣鴨君蝦夷、率数百人、守石手道。是日、坂本臣財等、次于平石野。時間近江軍在高安城而登之。乃近江軍、知財等来、以悉焚税倉、皆散亡。仍宿城中。会明、臨見西方、自天津・丹比、兩道、軍衆多至。

(『日本書紀』天武天皇元年七月壬子条)

また右は壬申の乱に關する記事の一部であるが、大友皇子方が、大海人皇子方が龍田山を越えてくることを聞いて高安城から逃げた、とある。高安城は生駒山脈の主峰である生駒山より南にある。大海人方が龍田山から登ってくるのに対して、同様に龍田山から下りるとも考えられないため、

大友皇子方は生駒山地を下りたと考えられる<sup>(7)</sup>。よって、少なくとも八世紀において生駒山脈を通るルートはあったとみてよいであろう。

また、吉川真司氏は、行基の創建した寺院とみられる廃寺跡が生駒山脈の街道沿いに面していることを指摘しており、その街道は奈良時代から存在したとしている<sup>(8)</sup>。

以上のことを踏まえると、八世紀の時点では、大和国から生駒山脈を通じて河内国へ抜ける道路は存在したといえる。

しかし、大和国の西側にはその他にも名のついた道路が確認できる。それが「草香の直越え」と呼ばれる道である。ただしこの道は詳細がわかっておらず、実態については諸説わかれている状態である。これまでの研究では、足利健亮氏は現在の東大阪市の石切に通じる辻子谷越に比定し<sup>(9)</sup>、千田稔氏は平城京南辺と難波京南辺をつなぐ路線とする<sup>(10)</sup>。

#### 五年癸酉超「草香山」時神社忌寸老麻呂作歌二首

直超乃此徑尔弓師押照哉難波乃海跡名附家良思蒙

〔直越のこの道にしておしてゐるや難波の海と名付けけらしも 』万葉集』巻六 九七七番歌 神社老麻呂〕

右の歌には、草香山の「直越え」と呼ばれる道で難波の海を眺めている様子が詠まれている。現代の地名にも、難波からほぼ真東の生駒山の麓に「日下」という地名が確認できる。これは先述した『日本書紀』の神武天皇の記事に現れた孔舎衛の坂の周辺にあたる。直越えの道から難波の海を眺めるといふ、この歌に詠まれた景観を考えあわせると、「直越え」の道は日下の辺りから生駒山地を通っていたと考えられる。また、『古事記』では、「初、太后坐「日下」之時、自「日下」之直越道、「幸行河内。」（下巻、雄略天皇段）とあり、雄略天皇が日下（草香）の皇后的もとへ草香の直越えを通じて河内国へ行幸していたとする。このこ

とからも、日下の地と草香の直越えは密接な関係があることがわかる。足利氏によっても、草香の直越えが草香の地名の場所を通ることが指摘されている<sup>(11)</sup>。

また、右に挙げた歌の題詞に見える「草香山」がどこを指すのかについても考えたい。「日下」の地名が現在の生駒山の麓にあることはすでに述べた。題詞にみえる「草香山」を生駒山地の西側の名称とする説もある<sup>(12)</sup>。しかし、その説には疑問も残る。『万葉集』の神社老麻呂の歌は、もう一首から河内国の側から大和国へ越えるという状況であることがわかっている<sup>(13)</sup>。また、草香山を詠んだ歌はほかに次のような歌があるが、これも難波から大和国へ越える状況を詠んだものであり、生駒山脈の西側一帯を指すという強い証拠にはならない。

#### 草香山歌一首

忍照 難波乎過而 打靡 草香乃山乎 暮晚尔 吾越来者 山毛世尔 咲有馬醉木乃 不悪 君乎何時 往而早将見

〔おし照る 難波を過ぎて うちなびく 草香の山を 夕暮にわが越え来れば 山も狭に 咲ける馬酔木の にくからぬ 君を何時しか 往きてはや見む 卷八・一四二八番歌 作者不明〕

反対に、先に挙げた『日本書紀』神武天皇即位前紀の場合も、河内国から大和国へ越えようとしており、ここでは「胆駒（生駒）山」と呼ばれている。また、次の歌は、難波津から生駒山脈を詠んだ歌である。

奈尔波刀乎 己岐渥弓美例婆 可美佐夫流 伊古麻多可祢尔 久毛曾多 奈妣久

（難波津を漕ぎ出て見れば神さぶる生駒高嶺に雲ぞたなびく 』万葉集』巻二十・四三八〇番歌 防人）

このように河内国側からも「生駒山」と呼ばれる場合があることがわかる。常に「草香山」の名で呼ばれるわけではないようである。「草香山」とは生駒山脈の西側一帯の広範囲に適用される名称ではなく、生駒山地の中の、日下から登った辺りを呼ぶこともあったと考えるのが妥当であろう<sup>(14)</sup>。草香の直越えも生駒山脈を越える道の一つであったと考えることができる。

以上、大和国の西方へ向かう道路と山との関係を考察してきたが、大和国と河内国は南北に長い山地で接している。ここで、他の史料によっても、八世紀当時の「生駒山」の指す範囲を推定してみたい。生駒山は、現在「生駒山脈の主峰」と説明されるが、果たして実際に生駒山が山脈中の主峰のみを指すのか検討する。

先に挙げた『万葉集』巻二十の防人歌は、難波津のある西側から大和国を見た場合の「生駒高嶺」が詠まれるが、難波から船を漕ぎ出すという状況を考えれば、南北に長い山脈の一部だけをそう呼んでいるとするのは不自然であろう。それよりも、山地一帯を象徴させて「生駒山」と呼んでいると考えた方が自然である。

十一月丙子朔。蘇我臣入鹿遣<sub>二</sub>小徳巨勢徳太臣。大仁土師娑婆連<sub>一</sub>。掩<sub>二</sub>山背大兄王等於斑鳩<sub>一</sub>。或本云。以巨勢徳太臣。倭馬飼首為<sub>二</sub>將軍<sub>一</sub>。於是。奴三成与<sub>二</sub>数十舍人<sub>一</sub>出而拒戦。土師娑婆連中<sub>レ</sub>箭而死。軍衆恐退。軍中之人相謂之曰、一人当千、謂<sub>二</sub>三成<sub>一</sub>歟。山背大兄仍取<sub>二</sub>馬骨<sub>一</sub>投<sub>二</sub>置内寝<sub>一</sub>。遂率<sub>二</sub>其妃并子弟等<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>間逃出。隱<sub>二</sub>膽駒山<sub>一</sub>。  
 (『日本書紀』皇極天皇二年十一月丙子条)

右は、山背大兄王が蘇我入鹿に襲われた際の記事である。この記述によれば、山背大兄王は斑鳩宮にいたが、入鹿側によって襲われたところ、隙を見て生駒山に逃げたという。斑鳩宮は現在の法隆寺東院の場所にあった

とされる。その斑鳩から主峰とされる生駒山までは、やや距離がある。逃亡に際しては手近なところへ向かうのが自然であると考えられる。また、四、五日山中に留まった後、斑鳩宮へ帰ったとある。斑鳩宮から西に向かい、生駒山地の一部に隠れたとみてよいのではないだろうか。

以上検討してきたように、龍田山に限らず、生駒山脈を通る交通路も機能しており、山が境界として認識されていたことがわかる。大和国と河内国は南北に長く接しているため、国を越える際にも複数のルートがあったと考えられる。

最後に、最も問題が多いと思われる東側について検討する。『万葉集』における例を見ても東側は特殊といえ、春日山が景物として詠まれることはあっても、旅をする当事者がそれらを歌に詠み込むことはない。それでは、大和国の東には、境界を認識しうるような交通路はなかったのだろうか。以下で、大和国から東へ出る交通路の検討と、それが境界意識にどのような影響を与えたかの考察を行う。

まず挙げられるのは、壬申の乱の際に大海人皇子が取ったルートである。

(前略) 是日、発<sub>レ</sub>途入<sub>二</sub>東国<sub>一</sub>。事急不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>駕而行之、倏遇<sub>二</sub>県犬養連大伴鞍馬、因以御駕。乃皇后載<sub>レ</sub>輿從之。逮<sub>二</sub>于津振川、車駕始至。便乘焉。是時、元從者草壁皇子・忍壁皇子、及舍人朴井連雄君・縣犬養連大伴・佐伯連大目・大伴連友国・稚椋部臣五百瀬・書首根摩呂・書直智徳・山背直小林・山背部小田・安斗連智徳・調首淡海之類廿有餘人、女孺十有餘人也。即日、到<sub>二</sub>菟田吾城<sub>一</sub>。大伴連馬來田・黃書造大伴、從<sub>二</sub>吉野宮<sub>一</sub>追至。於<sub>二</sub>此時<sub>一</sub>、屯田司舍人土師連馬手供<sub>二</sub>從駕者食<sub>一</sub>。過<sub>二</sub>甘羅村<sub>一</sub>、有獵者廿餘人。大伴朴本連大國為<sub>二</sub>獵者之首<sub>一</sub>。則悉喚令<sub>二</sub>從駕<sub>一</sub>。亦徵<sub>二</sub>美濃王<sub>一</sub>。乃參赴而從矣。運<sub>二</sub>湯沐之米<sub>一</sub>。伊勢国駄五十匹遇<sub>二</sub>於菟田郡家頭<sub>一</sub>。仍皆棄<sub>レ</sub>米、而令<sub>二</sub>乘<sub>レ</sub>步者<sub>一</sub>。到<sub>二</sub>大野<sub>一</sub>以日落也。山暗不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>進行。則壞<sub>二</sub>取当邑家籬<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>燭。及<sub>二</sub>夜

半、到<sup>二</sup>隱郡<sup>一</sup>焚<sup>二</sup>隱馭家<sup>一</sup>。因唱<sup>二</sup>邑中<sup>一</sup>曰、天皇入<sup>二</sup>東國<sup>一</sup>。故人夫諸參赴。然一人不肯<sup>レ</sup>来矣。將及<sup>二</sup>横河、有<sup>二</sup>黒雲<sup>一</sup>。広十余丈<sup>レ</sup>経<sup>レ</sup>天。時天皇異之。則拳<sup>レ</sup>燭親乘式占曰、天下兩分之祥也。然朕遂得<sup>二</sup>天下<sup>一</sup>歟。即急行到<sup>二</sup>伊賀郡<sup>一</sup>、焚<sup>二</sup>伊賀馭家<sup>一</sup>。逮<sup>二</sup>于伊賀中山<sup>一</sup>、而当国郡司等率<sup>二</sup>數百衆<sup>一</sup>帰焉。 (『日本書紀』天武天皇元年六月甲申条)

これによれば、大友皇子は、現在の吉野町津風呂の地と推定されている津振川に至り、同日に菟田吾城に到着したとある。菟田吾城とは、菟田は宇陀のことであり、吾城は『万葉集』に「安騎の野」、「阿騎の野」と見える地である。その後、宇陀を通過して伊賀国名隠郡に至る。

また、天平十二(七四〇)年に藤原広嗣の乱が起こった際に聖武天皇が伊勢国に行幸した際も大和国山辺郡竹谿村を通過して、伊賀国名張に至っており、同様のルートであったと考えられる。(図2参照)

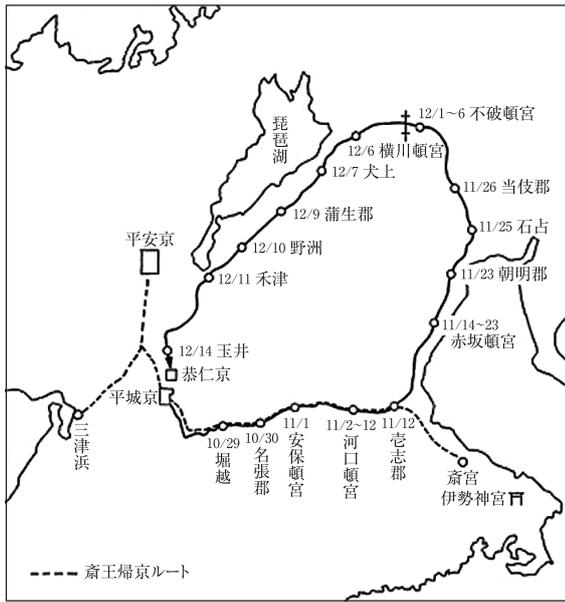


図2 壬申の乱と聖武天皇の行幸ルート(仁藤敦史「離宮・頓宮・行宮」(条里制・古代都市研究会編『古代の都市と条里』、吉川弘文館、2015年)より)  
※日付は聖武天皇の行幸時のもの

(前略)是日。到<sup>二</sup>山辺郡竹谿村堀越頓宮<sup>一</sup>。癸未。車駕到<sup>二</sup>伊賀国名張郡<sup>一</sup>。 (『続日本紀』天平十二年十月壬午・癸未条)

次は霊亀元年に伊賀国に通じる都祁山道が開かれたことを記す記事である。図1からわかるように、平城京から一度南下して大和国を出る道である。

開<sup>二</sup>大倭国都祁山之道<sup>一</sup>。 (『続日本紀』霊亀元年六月庚申条)

ほかには、斎王の通るルートも挙げられる。現在判明するのは平安

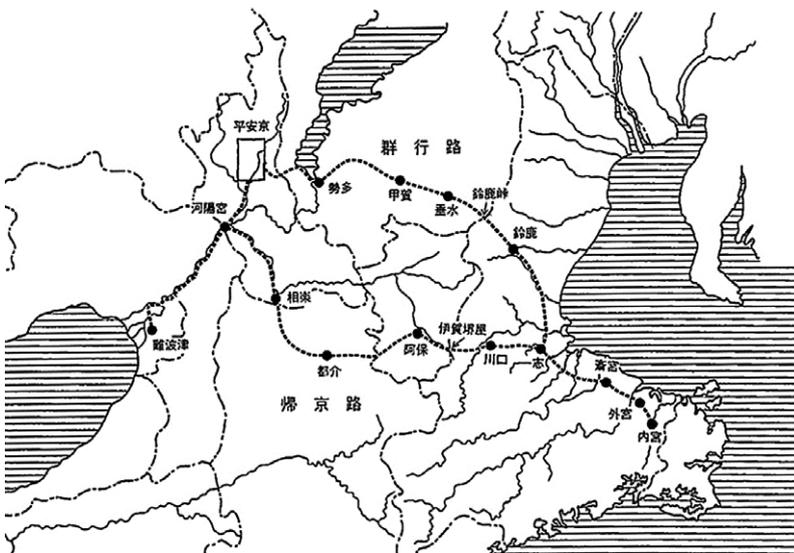


図3 斎王群行のルート(斎宮歴史博物館、1998年より)

時代のものであるが、帰りは奈良時代の道を使っていたと推測されている。また、大伯皇女が斎王として伊勢に向かう際には大和国の初瀬から伊賀の名隠、阿保を経て伊勢に至るものであったと考えられている<sup>15)</sup>。

(図3参照)

以上、大和国から東へ向かう交通路を史料から検討してきたが、総じて、東へ向かう道は他の道と異なり、境界が意識されることを示すようなものが見当たらないように思われる。また、記録にもほとんど現れることがない。平城京から東へ向かうには、いったん京内から南へ向かう必要がある、かつての都である藤原京へと進むことになる。よって、東へ向かうという体感が乏しかったことも理由の一つであると考えられる。

ここまで山と境界との関わりについて述べてきたが、最後にその境界としての性格を考えてみたい。

次に『万葉集』の歌を数例挙げる。

由布佐礼婆 比具良之伎奈久 伊故麻山 古延弓曾安我久流 伊毛我目乎保里

(夕さればひぐらし来鳴く生駒山越えてぞ我が来る妹が目を欲り

卷十五・三二五八九番歌 遣新羅使節)

伊毛尔安波受 安良婆須敵奈美 伊波祢布牟 伊故麻乃山乎 故延弓曾安我久流

(妹に逢はずあらばすべなみ岩根踏む生駒の山を越えてぞ我が来る

卷十五・三二五九〇番歌 遣新羅使節)

白栲尔 丹保布信土之 山川尔 吾馬難 家恋良下

(白栲にほふ真土の山川に我が馬なづむ家恋ふらしも 卷七・一一九二番歌 作者不明)

乞吾駒 早去欲 亦打山 将待妹乎 去而速見牟

(いで我が駒早く行きこそ真土山待つらむ妹を行きて早見む 卷

十二・三二一五四番歌 作者不明)

以上のように、『万葉集』に詠まれた旅の途上の山々は「帰る」「家」「妹」などの語と多く結びつく。このことから考えても、山とは自らの生活空間を区切る性格をもつ境界として認識されていたことがわかる。他に真土山については、先にも挙げたが、大和国から紀伊国へ越える際に、

亦打山暮越行而廬前乃角太川原尔 独可毛将宿

(真土山夕越え行きて廬前の角太河原にひとりかも寝む 卷三・

二九八番歌 弁基)

と詠まれている。ここで表現されているのは、真土山を越えると一人での旅寝であるとの感慨である。大和国側から越えれば旅の不安や寂しさを喚起させ、紀伊国側から越えれば家に帰ることができるという、単なる旅の目標点には留まらない、心理的な変化の境界点であったといえるだろう。

重要なのはこれらが周辺諸国との国境をなす山であることで、旅の際に意識されるのも交通路上の一点であり、それは改新詔や『出雲国風土記』での発想と同一であったといえる。

以上、交通路とその途上にある山との関係を考察してきた。平城京を取り囲む山々は単なる象徴や景物として歌枕的に詠まれているのではなく、交通路と密接に結びつき、実際の体験に基づいた場所として扱われていたのである。

## 第二章 境界と祭祀

前章では、交通路という実的な面から境界を論じた。そのほかに境界を意識するものとして、祭祀が挙げられる。本章では、大和国周辺で行われる祭祀と境界の関連について考察したい。

### 一. 交通祭祀

まず、旅の途上では手向けが行われる。次に挙げる『万葉集』の歌は大伴家持が越中に赴任する際のものであるが、そこで「幣奉る」と手向けの行為が詠まれる。

(前略)刀奈美夜麻多牟氣能可味尔奴佐麻都里安我許比能麻久(後略)  
(：砺波山手向けの神に幣奉り我が乞ひ禱まく： 卷十七・四〇〇八番歌 大伴家持)

時代は下るが、家持が手向けを行った砺波山の神は、手向神として独立した神であったことがわかる記事が『日本三代実録』にある。

八日癸卯。授<sup>二</sup>越中国正六位上手向神從五位下<sup>一</sup>。(元慶二年五月八日条)

これと同様に、先述した大和国と他国の国境の山でも手向けが行われていたことが、以下に挙げる『万葉集』の歌で確認できる。

佐保過而寧楽乃手祭尔置幣者妹乎目不離相見染跡衣  
(佐保過ぎて奈良の手向けに置く幣は妹を目離れず相見しめとぞ  
卷三・三〇〇番歌 長屋王)

石上振乃尊者弱女乃或尔縁而馬自物繩取附肉自物弓笑圍  
而王命恐天離夷部尔退古衣又打山從還来奴香聞

(石上布留の命は手弱女の惑ひによりて馬じもの繩取り付  
け獸じもの弓矢囲みて大君の命畏み天離る鄙辺に罷る古  
衣真土の山ゆ帰り来ぬかも 卷六・一〇一九番歌 石上乙麻呂)

父公尔吾者真名子叙妣刀自尔吾者愛兒叙参昇八十氏人乃手向  
為恐乃坂尔幣奉吾者叙追遠杵土左道矣

(父君に我れは愛子ぞ母刀自に我れは愛子ぞ参る上る八十氏人  
の手向けする畏の坂に幣奉り我れはぞ追へる遠き土佐道を  
卷六・一〇二二番歌 石上乙麻呂)

一首目の「奈良の手向け」とは奈良山のことを指す。前章で指摘した山々は地理的な感慨が託されるに留まらず、交通路上の重要な境界地点として、祭祀の一つである手向けが行われていたことがわかる。

最初に挙げた砺波山も、越中国と越前国との国境にある山である。その他にも、「坂の神」が各国の風土記に確認できることを、荒井秀規氏が指摘している<sup>(16)</sup>。坂という地形は、大和国周辺に限らず祭祀的な性格を持つ場所であった。

### 二. 疫神祭祀

もう一つ挙げられるのが疫神祭祀であるが、これには都城の四隅の道の上で行う道饗祭や畿内十堺疫神祭がある。

道饗祭とは、都城の四隅の道路上において、疫病や鬼神の類を饗応して、入らせないようにする祭のことである。

道饗祭(謂。卜部等於<sup>二</sup>京城四隅道上<sup>一</sup>而祭之。言欲<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>鬼魅<sup>一</sup>自<sup>レ</sup>外来者、不敢入<sup>乙</sup>京師<sup>甲</sup>。故預迎<sup>二</sup>於道<sup>一</sup>而饗遇也。)(『令義解』神祇令季夏条)

畿内十堺祭は、『続日本紀』に「祭疫神於京師四隅・畿内十堺」。(宝龜元年六月甲寅条)と見えるもので、畿内の十箇所の堺に疫神を祀るものである。『延喜式』によれば、山城と近江、丹波、摂津、河内、大和、伊賀のそれぞれの国境、大和と伊賀、紀伊の国境、和泉と紀伊の国境、摂津と播磨の国境のそれぞれで行われた。関口靖之氏は、これら祭祀が行われた場所を主要道が交差する「チマタ」に比定している<sup>(17)</sup>。つまり、これらの祭祀も交通路と密接な関係を持つているのである。

ただし、これらの祭祀に関しては都城や畿内という制度に関わるため、手向けのような個人の境界に対する認識と単純に同一視することはできない。鬼塚久美子氏も、こうした境界祭祀が、「政治的境界である国境を重視するという同様の意識によって祭祀の場が定められていたことは想定できる」と述べている<sup>(18)</sup>。しかし、中村英重氏が、疫神が人間に付随して交通路から入ってくると考えられていたことを指摘し<sup>(19)</sup>、前田晴人氏・山近久美子氏は、交通路を通じて入ってくる疫神を防ぐという意識があったという指摘を行っていることは注目すべきである<sup>(20)</sup>。制度上の境界における祭祀も、自らが交通路をたどるイメージを投影したものであったといえる。

右に述べた制度的な境界祭祀の以前の大和国周辺の疫神祭祀に関しては、前田晴人氏の論がある。前田氏は、次のような記紀の記述に見える奈良盆地周縁の地を祭祀の場所とし、それぞれ奈良山・大坂道の坂・宇陀や伊賀への坂道・真土山に比定した<sup>(21)</sup>。大坂戸は大和から河内へ越える穴虫峠(現在の奈良県香芝市西方、二上山北麓)と考えられている<sup>(22)</sup>。

即曙立王、菟上王二王、副其御子遣時、自那良戸遇跛盲。自大坂戸亦遇跛盲。唯木戸是掖月之吉戸卜而、出行之時、每到坐地、定品運部也。  
(『古事記』中卷)

復遣大彦与和珥臣遠祖彦国葺、向山背、擊埴安彦。爰以忌瓮、鎮坐於和珥武坂上。則率精兵、進登那羅山而軍之。時官軍屯聚、而躡趾草木。因以号其山、曰那羅山。  
(『日本書紀』崇神天皇十年九月甲午条)

九年春三月甲子朔戊寅、天皇夢有神人、誨之曰、以赤盾八枚・赤矛八竿、祠墨坂神。亦以黑盾八枚・黑矛八竿、祠大坂神。  
(『日本書紀』崇神天皇九年三月戊寅条)

後の二つの史料では、大彦命が奈良山に忌甕を据えたこと、墨坂神と大坂神にそれぞれ盾と矛が祀られたことがわかる<sup>(23)</sup>。これらはすべて境界祭祀とみられる行為である。

これは、先述した『万葉集』の例と同様に、盆地周縁の山を意識しているといえる。前田氏はこれらを律令制以前の祭祀と捉えたが、記紀が成立した八世紀にも、これらの境界が、右のような伝承にも現れるほど人々が意識したと見るのが妥当であろう。交通祭祀と疫神祭祀において意識され、区切られる範囲はおおむね一致するとみて良いであろう。

また、ここでは墨坂という『万葉集』では意識されていない東への交通路も現れる。この墨坂とは、大和国と伊勢国を結ぶ交通路上に位置する。普段の利用では意識されることのない東方も、祭祀においては意識されていることには注目すべきであろう。交通路としての利用の機会は少ないが、大和国とその外を区切る地点としての認識はあったといえる。

前田氏は『万葉集』において真土山の歌が詠まれることを「境界祭祀の行われた特異な場所であったため」としているが、氏が真土山を通る道に比定した「木戸」で祭祀が行われたことが明確にわかる史料はない。ただし、先に挙げた『古事記』にあるように、境界地点を越える際に足や目の不自由な人物に出会うことが吉・不吉をわけるといふ発想自体に、

多分に祭祀的な性格が見てとれる。また、他の方角に関しては奈良盆地周縁の山を祭祀の場所とする点は注目すべきである。

以上、境界で行われる祭祀について考察してきたが、ここで留意すべきは交通祭祀と疫神祭祀の性格の相違である。手向けなどの交通祭祀は自身の安全を祈願する私的な性格を持つものに対し、疫神祭祀は政治的な空間を外からの脅威から守るためのものである。それぞれ祭祀に託される性格はまったく異なるものである。しかし、このような性格の異なる祭祀においても、交通路という共通の原理が基になっている。このことから、境界となる地点の性格には私的かつ慣習によるものと、その慣習を下敷きとした公的かつ政治的なものと二重性があるともいえる。

## おわりに

境界の認識とは、諸研究が交通路との関わりを指摘するように、自ら移動する際の状況を投影したものであり、大和国においては、その地形的な特徴から周囲を囲む山が境界となりえた。つまり、自然地形が境界となされるといえることは、単なる地形的・景観的な理由からではなく、実際の交通における体感によるものであった。八世紀段階においても、改新詔の畿内境や『出雲国風土記』に見られるような交通路上に現れるものとしての境界認識が生きていたといえる。

また、「畿内十堺」などの点的な表現や、上述した交通路上の一点で祭祀を行うことを考え合わせても、境界が地点で表されるものであり、それが各方向において複数点に在している状態であったことがわかる。

八世紀当時における境界とは、明確な線によって囲まれた空間ではなく、各方向に伸びる交通路上の地点が点在する状態のものであったと考えられ、境界祭祀もそのような発想のもとに場所が定められていた。観念的に境界線が引かれ、都城の条坊制のような一つのまとまった空間が想定されていたわけではないであろう。バートン氏が「自然発生的な境界は、幅の

ある曖昧な「面」をなす傾向が強い」「前近代のものは、「線」ではなく「地帯」と呼ぶにふさわしいものが多かった」と指摘しているように<sup>(24)</sup>、この時代には、自らの移動の体験に則り、山などの空間を遮る一定の幅のある場所を境界と認識していたと考えられる。空間の把握という意味においては、自身が認知できる範囲での地点の集合体として把握していたのであり、明確な領域で把握しているものであるとはいえない。つまり、後の時代のような地図による俯瞰での把握とは性格が異なるものである。

今回は大和国を中心に検討を行ったが、これは当時の空間認識の一部に留まる。このような認識が他の地域でもいえるのか、ひいては七道や国土に関する観念に敷衍できるかなど、より広域的な視点で当時の境界認識を把握したいと考えている。特に、『宋書』の倭王武の上表文にも見られるように<sup>(25)</sup>、一点を中心とした東西南北の方角での領域の認識の方法は、倭国的な「天下」観にもつながると考えられる<sup>(26)</sup>。また、後の平安時代との比較を通して時代による変遷という観点からも検討したいと思う。

## 註

- (1) 折口信夫「民族史観における他界観念」(『折口信夫全集』第十六巻、中央公論社、一九六七年)、赤坂憲雄『境界の発生』(講談社、二〇〇二年)
- (2) ブルース・バートン「境界」とは何か―理論的考察の試み(村井章介・佐藤信・吉田伸之編『境界の日本史』、山川出版社、一九九七年)、一六四―一六八頁
- (3) 八木充「律令制村落の形成」(『律令国家成立過程の研究』、塙書房、一九六八年)、一三三頁
- (4) 出田和久「畿内の四至に関する試考―その地理的意味に関連して―」(『奈良女子大学二一世紀COEプログラム報告集6 古代日本と東アジア世界』、二〇〇五年)、二五六頁、門井直哉「歴史地理学からみた郡域編成の成立―評の「領域」をめぐる―」(奈良文化財研究

- 所編『古代地方行政単位の成立と在地社会』、奈良文化財研究所、二〇〇九年）、一六―一七頁
- (5) 門井、前掲註(4) 論文、一八頁
- (6) 中村太一「古代の道路と景観」(鈴木靖民ほか編『日本古代の道路と景観―駅家・官衙・寺―』、八木書店、二〇一七年)、四四頁
- (7) 大海人方の通った大津・丹比の両道は、岸俊男によれば丹比道は現在の竹内街道に、大津道は竹内街道の北約一・九キロを並行する長尾街道とされている。(岸俊男「難波―大和古道略考」(『日本古代宮都の研究』、岩波書店、一九八八年)、一〇五―一〇六頁)
- (8) 吉川真司「行基と智識と天皇」(『天皇の歴史2 聖武天皇と仏都平城京』、講談社、二〇一一年)、一五〇頁
- (9) 足利健亮「撰河泉の古代計画道路」(『日本古代地理研究』 大明堂、一九八五年)、二四五―二四六頁
- (10) 千田稔「畿内―古代的地域計画との関係を中心に―」(木下良編『古代を考える 古代道路』 吉川弘文館、一九九六年)、五一―五三頁
- (11) 足利、前掲註(9) 論文、二四五―二四六頁
- (12) 新日本古典文学大系『万葉集』(岩波書店)の巻八・二四二八番歌の注釈はこの説を採る。
- (13) 難波方潮干乃奈凝委曲見在家妹之待将問多米(難波潟潮干のなごりよく見てむ家なる妹が待ち問はむ為 巻六・九七六番歌)とあり、自らの家のある大和国(おそらくは平城京)へ帰る前に難波潟をよく見ておこうという心境を詠む。
- (14) 次の歌は、『伊勢物語』二十三段において、河内国の高安に住む女が、大和国に住む男を思って詠んだものとして類似の歌が確認できる。時代は下るが、河内国側からも「生駒山」と呼ばれていた証左となりうる可能性がある。
- 君之当 見乍母将居 伊駒山 雲莫蒙 雨若雖零 (君があたり見つ つも居らむ生駒山雲なたなびき雨は降るとも 『万葉集』巻十二・二〇三二番歌)
- (15) 足利「大和と伊勢および紀伊の古道」(『日本古代地理研究』 大明堂、一九八五年)、二九三頁、斎宮歴史博物館「斎王群行と伊勢への旅」(斎宮歴史博物館、一九九八年)、三五―三七頁
- (16) 荒井秀規「堺としての坂と手向け―足柄坂を中心に―」(市澤英利・荒井秀規編『古代東国の考古学4 古代の坂と堺』、高志書院、二〇一七年)、三八―三九頁
- (17) 関口靖之「疫神祭祀地と主要交通路―「延喜式」にみる畿内十堺の検討」(『地理学報』二八、一九九二年)
- (18) 鬼塚久美子「古代の宮都・国府における祭祀の場―境界性との関連について―」(『人文地理』四七―一、一九九五年)、八頁
- (19) 中村英重「畿内制と境界祭祀」(『史流』二四、一九八六年)、四九頁
- (20) 前田晴人「古代国家の境界祭祀とその地域性」(『日本古代の道と衢』 吉川弘文館、一九九六年)、四一頁、山近久美子「交通に関わる祭祀」(『館野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報3 遺跡と技術』、吉川弘文館、二〇一六年)、二五九頁
- (21) 前田、前掲註(19) 論文、四六―四七頁
- (22) 岸俊男「大和の古道」(『日本古代宮都の研究』、岩波書店、一九八八年)、六九―七一頁
- (23) 坂に甕を埋めて境界とする行為は『播磨国風土記』に見える。  
甕坂者、讚伎日子逃去之時、建石命逐、此坂云、自今以後更不得入此界、即御冠置此坂。一家云、昔丹波与播磨堺国之時、大甕堀埋於此上、以為「国境」。故曰「甕坂」。(託賀那条)
- (24) バートン、前掲註(2) 論文、一七〇頁
- (25) 夷蛮伝倭国条に「東征毛人五十五国、西服衆夷六十六国、渡平海北九十五国」とあり、東西と海北の支配の及ぶ領域を示している。
- (26) 倉本一宏「大和王権の成立と展開」(宮地正人・佐藤信・五味文彦・高埜利彦編『新体系日本史1 国家史』、山川出版社、二〇〇六年)、一四―一五頁
- 本文中に引用した史料は、新日本古典文学大系『万葉集』(岩波書店)、新訂増補国史大系『日本書紀』、同『続日本紀』、同『日本三代実録』(以上、吉川弘文館)、新編日本古典文学全集『古事記』、同『風土記』(以上、小学館)を基にした。

二〇一九年九月二八日 受付  
二〇一九年二月一〇日 採択決定

---

# Recognition of Boundaries in the 8<sup>th</sup> Century: Focus on *Yamato*

KUBA Tomoyo

Department of Japanese Studies,  
School of Cultural and Social Studies,  
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

## Summary

This paper discusses the boundaries in *Yamato* from both artificial and natural perspectives. The following two points are discussed.

First, the relationship between the natural terrain and traffic routes is discussed. In ancient Japan, mountains and rivers were considered to be boundaries, as in the case of the boundaries of *Kinai* referred to in *Kaishin no mikotonori* in *Nihon-shoki*. The boundaries, however, were not clearly indicated lines, but served as landmarks representing directions. In the case of *Yamato*, Mt. Nara, Mt. Matsuchi, Mt. Ikoma and Mt. Tatsuta were considered to be boundaries in the north, south and west respectively. All these mountains are located on the traffic route from *Heijo-kyo*. The boundary on the east side of *Yamato* is not clear because people had to go south before heading east. It might have been difficult for people performed boundary recognition based on the traffic route to have a sense of going east.

Second, the relationship with rituals held at the boundary is discussed. One such ritual is *Tamuke*, a prayer safe travel at the major points on the road, for example, in the mountains. According to *Man'yoshu*, the mountains around *Yamato* are mentioned above were places for rituals.

It has been pointed out that the rituals were conducted on the boundaries of the capital and *Kinai*, because *Ekijin* (gods that bring illness) were considered to enter through the traffic route. Furthermore, the places where the rituals were thought to have been conducted correspond to the mountains that were regarded as boundaries. It is obvious that boundaries used for rituals were the basis for the traffic routes.

When a specific point was recognized as a boundary, it did not mean that the boundary was simply a natural feature, but provided certain situations when people travel on the traffic route. The boundaries in those times were of ambiguous width, unlike today's clear lines. It is assumed that the recognition of space was based on people's experience and perception.

**Key words:** 8<sup>th</sup> century, boundaries, ancient road, ritual at the boundaries, recognition of space

